

聖書が教える『救い』って何ですか？

「放蕩息子の^{たと}譬え」(新約聖書ルカの福音書 15 章) から



「まだ家まで遠かったのに」

もし、人生が死んで終わりならば、それは空しく、今を楽しく生きればよいという刹那的な生き方になります。しかし、人は、死んで終わりではありません。聖書では、私達が死んだ先に、天の御国と、最終的なさばきの場である火の池が用意されていることを明らかにしています。では、私達が天の御国にふさわしい生き方へ方向転換するためにはどうするべきでしょうか。それは、今まで神に背を向け歩んできた罪を告白し、神に立ち返ることです。そのことを放蕩息子の譬えから見てみましょう。

父のもとへ

「立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』」

「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。」(ルカの福音書 15 章 18～20 節)

弟息子は、父親との関係を壊し家を出た人間です。父親は健在で、未だ父の財産を分けてもらう時ではないのに、財産を分けてもらい、さっさと遠い国に旅立ちました。恐らくもう家には帰らないと決めて家を出たのです。だから、落ちぶれた状態では、恥ずかしくて戻ることはできないはずです。ところが、弟息子は、「こう

して彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった」と聖書は語ります。弟息子は、父親から分けてもらった財産を使い果たし、更に飢饉に見舞われて食べ物にも困り果て、ユダヤ人にとって汚れているとされていた豚の世話をするまでに落ちぶれていたのです。

父の愛

落ちぶれた弟息子の姿は、神から背を向け、神から離れた人間の象徴的な姿です。神が最初の人アダムとエバを造られたとき、弟息子が落ちぶれたのは、父親から背を向け離れた結果です。ですから、落ちぶれて全てを失ったから父親の許に戻るとするのは、虫のいい話ではないでしょうか。でも、弟息子も、それを

よく知っていたと思われれます。弟息子が父親の許に行くために立ち上がったのは、父親の許に帰るというよりも、父に背いた自分の罪を知り、父の前で告白し謝るためでした。弟息子は、父親に対して、自分の罪を認め告白し、「息子と呼ばれる資格はない。雇い人にしてくれ」と頼むつもりでした。